

## 『平和の君の姿を見る』ヨハネ12:12-19

- 12:12 その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、
- 12:13 しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、／「ホサナ、／主の御名によってきたる者に祝福あれ、／イスラエルの王に」。
- 12:14 イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは
- 12:15 「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王が／ろばの子に乗っておいでになる」／と書いてあるとおりであった。
- 12:16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。
- 12:17 また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。
- 12:18 群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。
- 12:19 そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」。

### ●序論

先日、パリオリンピックの開会式があり、史上初めて会場の外、しかも各国舟に乗っての入場パフォーマンスということで注目されたようですね。

さて、別にタイミングを合わせたわけではないのですが、今日の聖書箇所は、過越しの祭りを前にして、イエスさまがエルサレムに”入城”される情景が描かれています。

祭りの開始を意味するかのような入城のパフォーマンス？とも言えるような情景。それは勝手に人々がイエスを歓迎した…という一面もある一方、イエスさまご自身、このことを予測するかのように、ろばの子に乗ってエルサレムに入られました。

ここに意味がある。それをみ言葉に照らしてそれを「平和の君の姿を見る」と題して共に見てまいりましょう。

### ●本論

#### I. イエスを迎える人々の思い

:12 その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、

:13 しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。

イエスさまがこの時、なぜこれほどまでに歓迎されたのか。そのきっかけと理由です。

:17 また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。

:18 群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。

そして目的は何か。

それはイエスを自分たちの王、つまり「イスラエルの王」とする期待感があったためでした。

:13 しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。

そういう動きは以前にもありました。

:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた

シュロの葉を持ち、王を迎えるという民が勝利の凱旋者たちを迎えるというありさまは、紀元前2世紀ころに、シリアのアンティオコス・エピファネスという王が、エルサレム神殿に偶像礼拝を持ち込み汚したその事件をきっかけにユダヤのマカバイオス家が立ち上がって勝利をおさめた、その凱旋時になされた歓迎の様子でした。

ですから、時を経てローマの支配下にある人々が、イエスを「イスラエルの王」と叫んで歓迎する、そのありさまは、自分たちを解放してくれる軍事的力を持つ勝利の王としての期待感が込められたいたことがわかります。

イエスさまはそのように王として担ぎ上げられることを避けてきました。

しかしこの日、イエスさまはその歓迎の中に自ら入っていかれるように進まれたのです。

## Ⅱ. ろばの子に乗るイエスの思い

民衆は、自分たちを解放する軍事的・政治的な王を求め、イエスさまはこれから受ける受難と十字架の死を迎えるキリストとして歩まれたのです。

その理解の開きがあることを誰よりもイエス様ご自身が知っておられてなお、そこを進まれたイエスさまの側の理由は、ここにご自分の時が来たからにほかなりません。

12:23 すると、イエスは答えて言われた、「人の子が栄光を受ける時がきた。そして民衆との理解のギャップを埋めるありさまが、あのろばの子に乗って入場するありさまだったのです。

何かの権威や力を主張するなら、立派な軍馬です。または数頭立ての馬車でしょう。その馬が力を示すものであるから…でした。

しかし、イエスさまは、ろばの子を入場の際にお選びになられたのです。

そ力をあえて主張しない。そこに別の意味を主張する、それがイエスさまのお姿だったのです。

ゼカリヤ9:9「シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。」

これは、遡ること、数百年前に記されたメシアについての預言です。

それはこの世の権力者のありさまではありませんでした。

柔和な者、平和の王と記された方のお姿は数日後に架けられるさばきと十字架の受難につながっていきました。徹底してへりくだり、向けられた悪意をすべて受け、それでも柔和で、すべてを負われて十字架にかけられたのです。

権力と武力によって人々を率いてエルサレムと群衆を支配するのではなく、ご自分の命を十字架上で犠牲にして、すべての人の贖いの供え物となるためであったのです。

ろばの子はそのことを示す乗り物でした。

ただ、その現場でそのことを理解していた人はほとんどいませんでした。

12:16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。

この後、ヨハネの福音書の後半、あのろばの出来事を理解するのにも、十分なイエスさまの言葉があったかと思います。

それでも、弟子たちは。いや私たちもそうです。自分の経験や先入観から、イエスさまのなさることもはかる…ことがある。そしてイエスさまのお言葉やなさっていることの意味が分からない、ということが多いのです。

12:16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、…

ああ、それじゃ手遅れじゃないか…、という私たちの不理解をもイエスさまは覆い包んでくださっています。少し時間が必要なのが、弟子たちであったし、わたしたちでもあるのです。

時間をいただき、聖霊の助けをいただき、教会の助けをいただいて、イエスさまの思いを受け止めることができれば感謝ですね。

### Ⅲ. イエスが示す平和への思い

イエスさまは既に、群衆が求めるご自分に期待するイメージをよくご存じでした。多くの権力者は、自分の理想に合わせ、また群衆のイメージに合わせようとします。

しかしイエスさまは、ご自分を、神の御心に合わせられたのです。

それは、先ほどのゼカリヤ書で預言された続きにある

ゼカリヤ9:10 わたしはエフライムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ。また、いくさ弓も断たれる。彼は国々の民に平和を告げ、その政治は海から海に及び、大川から地の果にまで及び。

そこに描かれるイエスさまは、戦車や軍馬や武器によらない「平和」を告げる姿です。そこには群衆が求めるがものとの大きな隔たと開きがありました。

イエスさまと群衆との間に隔たりやイエスさまに対する誤解はいつもありました。

イエスさまもそのことをご存じでいながら、彼らの誤解の中を、神の思いをあらわすろばに乗って進みいかれたのです。

それは柔和であり、やさしいイエスさまのご人格、平和で人を愛し、謙遜にへりくだって仕える者として生きるありさまです。

それがイエスさまがあらわされた「王」としてのお姿でした。

ろばに乗って堂々と、その誤解と悪意をも受け取り、神さまと人との間にある隔てを取り除くために、十字架に向かわれたのです。

### ●さいごに

2018年公開当時「パウロ～愛とゆるしの物語」という映画

そこでパウロが語るのは、ゆるしであり愛です。繰り返し過去の自分のありさまが思い起こされるそのシーンから、愛され、赦されて生かされている今があることが描かれる。その経験があるからこそ、本当の意味でキリストの赦しを愛を徹底して信じて生き抜くことができる、彼の姿がありました。

そうやって一世紀に生き抜いたキリスト者たちは、武力を求めず、キリストを求めたのです。それは、あのろばの子に乗ってエルサレムに入場される姿が、わかるようになるということなのでしょう。そしてそれこそが信仰の中で見いだすキリストの姿なのです。

最後に パウロは手紙の中でこう記します。

1コリント1:18-24 十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。… このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。